

半太郎の山芋掘り

昔、皆田(日置市)に半太郎という男がいました。快活で親切な人柄でしたので、誰からも好かれていました。

ある日のこと、山芋を掘りに行こうと思いい川の上流に行きました。山芋のありそうなところとして目星をつけていたのです。

「おれの勘が当たればよかどねえ」と、クワを持って掘ろうとしました。そのとき突然、黒雲が空を覆ったかと思うと、滝のような雨が降り出しました。半太郎は慌ててクワやカゴをかかえ、崖下の大きな木の根元に逃げ込みました。そうして雨宿りをしました。しかし、雨はいつこうにやみません。

「こん降り方じゃ山芋掘りは駄目か」と、つぶやいていると、どこからともなく、「くゆるー、くゆるー(崩れる、崩れる)」という声が聞こえてきました。半太郎は思わず、「くゆるなら、くえてみれ(崩れるのなら崩れてみよ)」と大声で叫んでしまいました。そのとたん、ドドドーという地響きと共に崖が崩れました。そしてそ



の泥の中にはたくさん山芋があつたのです。半太郎はその山芋をカゴに入れて背負い持ち帰りました。それを、近所の人たちに分けてあげたので、大変喜ばれました。

半太郎堀という地名はこの崖が崩れたところとして、今も伝えられています。

ところで、村には、人からあまり好かれなない意地悪な男がおりました。半太郎の話聞いて、自分も山芋掘りに出掛けました。ここだと思ふ場所で掘ろうとしたとき、急に黒雲がたちこめ、大雨となりました。崖下の大きな木の根元で雨宿りをしていると、「くつどー、くつどー(来るぞ、来るぞ)」という声がします。思わず、「来つなら(来るなら)来てみよ」と大声で叫んだところ、大きな石が転がってきます。男は石に当たって怪我をして動けなくなりました。やがて、心配して探しに来た家族に助けられ帰っていったそうです。

(原話「東市来町郷土誌」
文／有馬英子 絵／二石綱夫